慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ドナ・トーア著 トム・マンとその時代
Sub Title	Dona Torr; Tom Mann and his times
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1958
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.51, No.10 (1958. 10) ,p.916(76)- 921(81)
JaLC DOI	10.14991/001.19581001-0076
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19581001-0076

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評及び紹介

ドナ・トーア著

『トム・マンとその時代』

(Dona Torr; Tom Mann and His Times, Vol. 1, 1956)

イギリスでは、マルクス主義の立場からする社会主義運動史や労働運動史の研究は、まだほんの短い歴史を有しているにすぎない。創立以来半世紀以上に及ぶイギリス労働党が、保守党と対峙して、「議会主義、民主主義による社会主義の実現」、いわゆる民主社会主義をイデオロギーとしているこの国においては、人民の歴史が書かれたとしても、その基本的な立場はホィッグ的な世界観か、せいぜいフェビアン主義的な影響から脱却することはできなかった。われわれは、前者の代表的なものとしてトレヴェリアン（G. M. Trevelyan）を、そして後者を代表するものとしてコール（G. D. H. Cole）をあげることはできないであろうか。

ところが最近、このいわば正統派とも言うべき一派にたいして、マルクス主義的な立場からする接近が、社会運動史の研究に見られるに至ったことは、注目すべきことであるといわなければならない。

すなわちドナ・トーア女史を中心とする若い潑溂たる研究者たちのグループ――主としてマルクス主義的な立場に立つ――である。彼らの存在が、わが国において一躍注目をあびたのは、一九五四年に公刊されたドナ・トーア女史古稀記念論文集「民主主義と労働運動」が紹介されてからであった。ブルジョア革命の研究をもってすでにわが国にも有名なクリストファ・ヒルや、最近来日した価値論の研究家ロンルド・ミーク、またイギリス労働運動の研究家としてその実力を高く評価されているA・L・モートン、ジョン・サヴィル、E・J・ホッブスバウムやヘンリー・コリンズ等はみな、直接あるいは間接にドナ・トーア女史の教えをうけたのであった。

彼女はイギリス共産党の成立に関係した古い党員で、マルクスの「資本論」やマルクス・エンゲルスの往復書簡集の英訳などのほかに、多くの著作がある。彼女は長い間かかって、「トム・マンとその時代」を書くための準備をととのえていたといわれ、この意味でこれは著者の畢生の労作であるということができよう。

われわれはいままで本書の対象であるトム・マンについて知るところが少なかった。ただ十九世紀の八〇年代にはじまる不熟練工の覚醒の頂点ともいうべき一八八九年のドック・ストライキを指導した闘士であったという点で記憶されていたにすぎなかった。しかしながらトム・マンの生涯は、あたかも十九世紀後半から二十世紀前半にかけてのイギリス労働運動の縮図であり、一八八五年に社会主義に改宗して以来、一九一〇年にはサンディカリスト、一九二〇年には共産主義者となって活躍し、一九三九年その生涯を終るまで、一貫して労働者階級の闘いの先頭に立つ裏切ることのない指導者であり、忠実にして勇敢な友であった。本書は、かつてトム・マンの同志としてともに闘ったドナ・トーア女史によるきわめて野心的なしかも興味深い伝記である。

(1) Democracy and the Labour Movement, Essays in Honour of Dona Torr, edited by John Saville, 1954.

＊　＊　＊

本書はトム・マンの八〇年にわたる闘争の生涯の前半、一八五六年から一八九〇年までの主として青年時代、一八八九年のドック・ストライキの勝利までの時代をとりあげている。その内容の主要な項目をあげてみよう。

序論　新しがりやの男

第一部　黄金時代に

一、ウォーウィクシアの少年（一八五六―七〇）

二、徒弟修業から大工業へ（一八七〇―七）

三、成長の時期（一八七〇―七）

第二部　偉大な変化にむかって

四、工場にて（一八七七―八一）

五、鉄則（一八八一―五）

第三部　中間の時期――自由にむかって

六、民主主義と庶民の幸福

七、失われた権利

八、農民、工匠そして他の人たち

九、権力の基礎

第四部　社会主義者トム・マン

一〇、新しい道徳の世界（一八八五―六）

一一、未熟な社会主義とトーリ・ゴールド（一八八五）

一二、革命的労働組合主義者（一八八五―七）

一三、トラファルガー広場（一八八六）

一四、北部における先駆者たち（一八八七―八）

一五、血の日曜日とその後（一八八七―九）

一六、新しい仕事、新しい友（一八八八―九）

一七、ドック・ストライキ（一八八九）

目次をみても明らかなように、本書のもっとも大きな特徴は、トム・マンが社会主義者として成長してゆく過程を生き生きと物語りながら、同時にそれは、イギリス社会運動史もしくは思想史にたいし、なみなみならぬ配慮を示していることであろう。すなわち著者は、イギリス社会運動史のなかにトム・マンを位置づけようとしているようである。本書の序言によれば、著者ドナ・トーア女史は、重い病いのため本書を完成することができないので、彼女の要請により、その厖大なノートを基礎にして第六章、第七章はクリストファ・ヒルが、また第八章および第九章はA・L・モートンが書き上げたといわれる。従って本書は、ひとりの著者によって書かれたの

ではなく、三人のすぐれたマルクス主義者によってまとめ上げられたものであることは記憶されなければならない。筆者はこの書の内容について、そのごくあらましをのべてみよう。

トム・マンは、一八五六年四月十五日、コベントリーのフォルスヒルというところに、ヴィクトリア炭坑の書記トーマスと家事使用人をしていたメリー・アンとの子として生れた。一八五〇年代といえば、イギリス資本主義は、かの飢餓と絶望の「チャーチストの時代」を経過して、ヴィクトリア黄金時代に入っていた時期である。当時の労働運動の指導者たちが、ほとんどみな窮乏のうちにその少年時代をおくったのに反し、トム・マンの生活は比較的静穏であった。一八七〇年、十四歳になったトムは、旋盤見習工として三〇〇人から四〇〇人ほどの労働者が雇われているバーミンガムの工場に入った。当時のバーミンガムの状態は、チャーチストの時代のそれと異ならず、依然として小親方層を中心とする金属労働者――釘製造工、火薬および銃製造職人など――の町であり、婦人および子供などによる極端に低い賃金と長時間労働にささえられていた中小工業者の町であった。従って、このような手工業的な都市にやがて近代的工業制度が滲透していったにせよ、労働条件は週六〇時間をこえることも珍しくなかった。トム・マンはこのような時代に、労働者の生活に入っていったが、当時、ヴィクトリア型組合の典型と呼ばれた合同機械工同盟（Amalgamated Societies of Engineers）は、九時間労働を要求して運動していた。

トム・マンの少年時代は、労働組合がその戦闘的精神を喪失して、もっぱら経済主義におちいった時代であり、労働者階級はむしろブルジョア急進主義、とくにチャールス・ブラッドロー（Charles Bradlaugh）やジョセフ・チェーンバレン（Joseph Chamberlain）などの影響をうけた。彼は一方においてこれらのブルジョア急進主義の影響をうけるとともに、これらを克服していったのであるが、とくに「進歩と貧困」の著者であって、土地単税論の主唱者ヘンリー・ジョージ（Henry George）から偉大な感化をうけたのであった（七六―七八頁）。しかしながら、彼をして社会主義に傾倒せしめたのは、ジョン・ラスキンとウィリヤム・モリスの著作であった。やがてのちに社会民主連盟の運動を通じて、親しくモリスと接する機会をもつようになるのであるが、この当時（一八八一年頃）の彼は、まだ社会主義者ではなく、合同機械工同盟の組合員であり、チャールス・ブラッドローの急進主義やマルサスの人口論の影響から脱することができなかった。以上は、第一部および第二部のごくあらましである。そして第三部はイギリス革命にはじまるレヴェラーズ（水平派運動）の運動からときおこし、オーエンやチャーチストの時代を経て一八七〇年頃までのイギリス社会運動思想史であり、トム・マンを生み出したイギリス社会主義思想の革命的伝統について縷々として語られている。この部分は、本書にたいしてトム・マンのたんなる伝記書以上の何物かをあたえているところであり、イギリス社会思想史の研究にたいする貴重な貢献であると言えよう。

第四部においては、一八八五年から一八八九年のドック・ストライキを頂点とするかの新組合運動の澎湃とおこってきたなかに、彼がいかに戦闘的労働組合主義者となり、社会主義運動に参加していったか、この点について語られている。トム・マンがウィリアム・モリスに深い感銘をうけていたことから、一八八五年彼は当時イギリスにおけるただひとつのマルクス主義者の団体である社会民主連盟（The Social Democratic Federation）に加入した。この団体は主としてH・M・ハインドマンを指導者とするマルクス主義者を中核としていたけれども、その理論はともすれば公式主義におちいりがちとなり、たとえば、社会主義者は、革命的な社会主義政党を建設すべきであって、労働組合に協力すべきではない。なぜならば、労働組合は、社会変革をめざすものではないからというような誤った考え方が横行していた。この社会民主連盟の運動は、ともすれば労働組合運動に対する軽視という戦術的な誤りをおかし、またハインドマンにみられる偏狭なセクト主義、俗物的な貴族主義は、連盟をして下部大衆から遊離せしめて一部の指導者の独占的な機関たらしめ、その結果、一八八四年分裂して、ウィリアム・モリスは社会主義者同盟（The Socialist League）を建設した。

だがモリスとてもその公式的な極左主義と無縁ではなかった。彼は議会主義を攻撃するに急のあまり、一八八五年の選挙に際し、社会主義者同盟の戦術として、選挙権の抛棄をよびかけるという無政府主義的傾向をさけることができなかったのである。すなわち、一八八〇年代の初頭には、フェビアン協会の人々を別とすれば左翼的な言辞を弄し、いたずらに革命を絶叫しながら、しかも無為にして過す知識人と、社会主義にほとんど関心を示さない合同機械工同盟によって代表される労働貴族層との間に何らの連絡もなく、むしろ労働者階級の運動には、さきにのべたブラッドローやチェーンバレン等のブルジョア急進主義者が影響をあたえており、その背後には、労働組合も、いわんや協同組合もなくうちすてられ、貧困と無知のなかに沈澱していた不熟練労働者の大群がうごめいていた。いわゆる大恐慌の嵐がイギリス資本主義の牙城をゆり動かしつつあった一八八〇年代、社会主義と労働組合運動とを結びつけ、頽敗のなかにうちすてられた不熟練工を起ち上らせ、イギリスの労働者階級の間に、かつてのチャーチストの時代の戦闘的精神を鼓吹することこそ、トム・マンに課せられた歴史的使命であったということができよう。

そこで彼はまず、いままで経済的な諸条件の獲得のみをもって労働組合の任務と考えている熟練労働者に社会主義を認識させ、一方労働組合をもって社会主義革命の達成をさまたげようとする無用の長物であると考える公式的な社会主義者に、労働組合の果す役割を正しく理解させようと努力した。ハインドマンの社会民主連盟とモリスの社会主義者同盟の分裂によって、当時の社会主義者が相互に反目葛藤をくり返しつつあったとき、彼は何よりも運動の具体的な目標として、八時間労働制の合法化を高くかかげたのであった。

当時の熟練労働者の大部分は、一八六〇年代までに週五十四時間

を獲ち得ていたが、その他の労働者、たとえば鉄道従業員、パン焼き職人、化学工場労働者などは二交代十三時間労働というひどい条件であり、その他スコットランドの炭坑夫は、組合をもちながら十二時間を強制されていたほどであった。いわんや商店の店員の如きは、一八八七年の取締条令（The Shop Hours Regulation Act）によって、十八歳未満の者は七四時間に制限されたにもかかわらず、監督制度の不備のために実施されなかった。

このような状態に注目したトム・マンは、社会主義のための闘争の一部分として、八時間労働制の運動をおこそうと考えたのであった。

すでに、かのチャーチスト運動のもり上る直前、オーエンのいわゆるグランド・ナショナルの運動のスローガンのなかに、八時間労働制の要求が見られ、その後第一インターナショナルにおいてマルクスがこれを強調し、その友アダム・ウィーラー（Adam Weiler）が労働組合総評議会（Trades Union Congress）においてこれをとりあげながら、一八八三年までほとんどかえりみられなかった。トム・マンの同志として、やがて一八八九年のドック・ストライキに際し、ともに指導的役割を果したジョン・バーンズ（John Burns）ですら、これに賛成しなかった。しかし彼はこのような極端な革命至上主義者にたいし、その戦術的な誤りを指摘すると同時に、労働者大衆にたいしては、八時間労働制は、低賃金をもたらすのではなく、むしろ失業を減少させ教育のための余暇をあたえることを説き、労働者階級の間からの支持を得ようとしたのであった。こうしてやがて、一八八七年には八時間労働制は、労働組合や社会民主連盟からも支持をうるようになった。第四部の前半は、以上にのべたように、社会主義運動と労働組合運動とを結びつけようとした彼の努力についてのべられているが、その後半は、不熟練工の覚醒、いわゆる新組合運動において、彼がどのような役割を果したか、とくに一八九九年のドック・ストライキ以前において、社会民主連盟がおかした冒険主義的な行動――一八八六年のトラファルガー広場におけるデモンストレーションの失敗――にはじまる暴動的な事件にたいし、社会民主連盟の無計画性と教条主義に疑問をいだきながら、やがて北部ノーサンバーランドの炭坑地帯において社会主義を説いて廻り、みずからも社会主義者として成長してゆく過程が描かれている。

本書の最後の一節は、いわゆる新組合運動の絶頂ともいうべきドック・ストライキについて、その歴史的な意義、トム・マンをはじめ、ジョン・バーンズ、ベン・ティレット（Ben Tillet）、アンニー・ベザント（Annie Besant）等の指導者の活躍について、きわめて生き生きと描写されており、その勝利にいたるまでの過程において発揮された不熟練労働者の革命的なエネルギーと、これを支援した国際的な労働者階級の運動の連帯性についてふれている。

「トム・マンとその時代」と題する本書のもっとも注目すべき特徴は、普通の伝記書に見られないほどの広汎な資料をもって、トム・マンの生涯を物語ろうとしていることであるが、主人公の生活に関係する限りにおいて、その時代的な背景にふれるのではなく、イギリス社会運動史についてのべながら、その流れのなかにトム・マンの生活と闘争を浮き彫りにしようとするような意図が見られることである。すなわち、厖大な資料の引用をもってうづめられている本書をただ漫然と読んでいると、ともすればトム・マンその人を見失ってしまうことがある。この点が本書の一大特長であり、また容易に読了をゆるさない原因ではなかろうか。もちろん本書の評価は第一巻だけでは軽々しくなされるべきではないが、要するに本書は、最近のもっとも読みごたえのある労作のひとつである。七〇歳を迎えてなお真理の探求に情熱をささげておられるドナ・トーア女史にたいし、筆者は心からなる敬意を表するとともに、本書の続巻が一日も早く出版されることを期待するものである。――一九五八・八・十二――

（飯田　鼎）

岡部寛之著

『保険学新講』

本書「保険学新講」の最大の特色は、わが国の、そしておそらくは世界最初の、マルクス経済学の立場よりする保険学の書たることである。このことは本書を読みかつ評するに際して極めて重視すべき事柄である。マルクス保険論の論文は、従来も在ることはあったが、一冊の書物となると絶えて見あたらない。本書は、「保険学方法論に初まり、理論保険学、保険史、保険政策の三篇、十七章」（序一頁）の内容をマルクス理論という一本の糸で貫き通し、一応、殆んどの保険の問題を、そしてそれらを体系化して記述していて、断片的な、個々の特別な問題についてのみのマルクス保険理論という従来のこの方面の研究とは、明らかに隔絶している。「理論的立場はいうまでもなく『資本論』の正当さに立脚して如何に保険を把握するかにあり、そして一応経済学的にとりあげべき、保険をめぐる諸問題についてはすべて取りあげて検討を試みた」（序一頁）とする著者の意図は、まずまず達成せられていると思われる。このことにおいて、本書は数多くの保険学の書物のうちにあって燦として輝くものである。好むと好まざるとに拘らず、マルクス保険学を学ばんとするものは、必ず、本書を、一度は通らなければなるまい。

本書は経済学の書物である。「『理論保険学』、或いは『保険学原理』と題することも出来る」（序一頁）とされる本書は、「従来の保険論は学ではなくして、あくまでも論であり、保険に関する知識の寄せ集めにしかすぎない」（序一頁）、その「保険論を牢頭一歩進めて、経済学の一分野としての保険学の地位にまで引き上げんとする」（序一頁）。確かに本書の全篇は保険に関する経済学的思考に終始され、旺溢している。保険史、保険政策の部分が鮮少に過ぎると